

JP2003229599

Title:

**BORON PHOSPHIDE TYPE SEMICONDUCTOR DEVICE, METHOD OF
MANUFACTURING IT, LIGHT-EMITTING DIODE AND BORON PHOSPHIDE
TYPE SEMICONDUCTOR LAYER**

Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To provide a boron phosphide type semiconductor device, in which a characteristic is advanced, providing a polycrystalline boron phosphide type semiconductor layer stably including twins which have twin faces having specific crystal directions.

SOLUTION: A substrate is formed with (111) Si single crystals having surfaces constructed with (111) crystal faces, a laminated boron phosphide type semiconductor layer is constructed with a polycrystal layer in which a plurality of single crystal body, which has a bottom face formed with (111) the crystal face and also is surrounded by a face equivalent to (111) the crystal face, constructed with square spindle shape boron phosphide type semiconductor crystals are got together; further, the single crystal body has a twin boundary surface having a tilt angle of 60 degrees against (110) a crystal orientation of the substrate.

COPYRIGHT: (C)2003,JPO

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2003-229599

(P 2 0 0 3 - 2 2 9 5 9 9 A)

(43) 公開日 平成15年 8 月15日 (2003. 8. 15)

(51) Int. Cl. ⁷	識別記号	F I	テーマコード (参考)
H01L 33/00		H01L 33/00	A 5F041
21/20		21/20	C 5F045
21/205		21/205	5F052

審査請求 有 請求項の数 7 O L (全 8 頁)

(21) 出願番号	特願2002-26271 (P 2002-26271)	(71) 出願人	000002004 昭和電工株式会社 東京都港区芝大門 1 丁目13番 9 号
(22) 出願日	平成14年 2 月 4 日 (2002. 2. 4)	(72) 発明者	山下 任 千葉県千葉市緑区大野台 1 - 1 - 1 昭和 電工株式会社総合研究所内
		(72) 発明者	宇田川 隆 埼玉県秩父市大字下影森1505番地 昭和電 工株式会社総合研究所秩父研究室内
		(74) 代理人	100118740 弁理士 柿沼 伸司

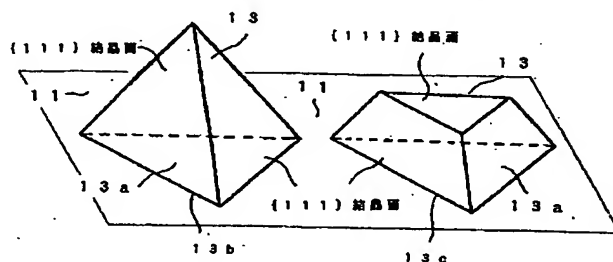
最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 リン化硼素系半導体素子、その製造方法、発光ダイオードおよびリン化硼素系半導体層

(57) 【要約】

【課題】 本発明は、特定の結晶方向を双晶面とする双晶を安定して含む多結晶のリン化硼素系半導体層を備えることにより、特性の向上したリン化硼素系半導体素子を提供する。

【解決手段】 基板を、表面を { 1 1 1 } 結晶面とする { 1 1 1 } - S i 単結晶とし、その上に積層するリン化硼素系半導体層を、 { 1 1 1 } 結晶面からなる底面を有し、且つ { 1 1 1 } 結晶面と等価な面で囲まれた、複数の四角錐状のリン化硼素系半導体結晶の単結晶体を集合させた多結晶層から構成するものとし、さらに単結晶体は基板の < 1 1 0 > 結晶方向に対して 6 0 度の角度で傾いた双晶境界面を有するものとする。



【特許請求の範囲】

【請求項 1】珪素 (Si) 単結晶からなる基板と、該基板の表面上に形成された、基板の表面を構成する結晶面と同一の結晶面を有するリン化硼素系半導体結晶からなるリン化硼素系半導体層とを備えたリン化硼素系半導体素子に於いて、前記の基板が、表面を {111} 結晶面とする {111}-Si 単結晶からなり、前記のリン化硼素系半導体層は、基板の {111} 結晶面に平行に配列したリン化硼素系半導体結晶の {111} 結晶面からなる底面を有し、且つ {111} 結晶面と等価な面で囲まれた、複数の四角錐状のリン化硼素系半導体結晶の単結晶体を集合させた多結晶層から構成され、さらに該単結晶体が、基板の <110> 結晶方向に対して 60 度の角度で傾いた双晶境界面を有することを特徴とするリン化硼素系半導体素子。

【請求項 2】前記リン化硼素系半導体層の上に III-V 族化合物半導体層が積層されて形成された異種 (ヘテロ) 接合を有し、該 III-V 族化合物半導体層が、リン化硼素系半導体層をなす単結晶体の表面に交差する結晶面の面間隔 (格子間隔) に一致する間隔で配列した結晶面から構成されることを特徴とする請求項 1 に記載のリン化硼素系半導体素子。

【請求項 3】前記リン化硼素系半導体結晶の単結晶体が、単量体のリン化硼素 (boron monophosphide) 結晶からなることを特徴とする請求項 1 または 2 に記載のリン化硼素系半導体素子。

【請求項 4】前記リン化硼素系半導体層を、{111}-Si 単結晶基板上に 950℃ 以上 1100℃ 以下の温度に於いて、有機金属熱分解気相成長法 (MOCVD 法) により、成長速度を毎分 20nm 以上 60nm 以下として形成することを特徴とする請求項 1 ないし 3 に記載のリン化硼素系半導体素子の製造方法。

【請求項 5】前記リン化硼素系半導体層を、{111}-Si 単結晶基板上に 1025℃ 以上 1075℃ 以下の温度に於いて、有機金属熱分解気相成長法 (MOCVD 法) により、成長速度を毎分 30nm 以上 40nm 以下として形成することを特徴とする請求項 4 に記載のリン化硼素系半導体素子の製造方法。

【請求項 6】請求項 1 ないし 3 に記載のリン化硼素系半導体素子からなる発光ダイオード。

【請求項 7】珪素 (Si) 単結晶からなる基板の表面上に形成された、基板の表面を構成する結晶面と同一の結晶面を有するリン化硼素系半導体結晶からなるリン化硼素系半導体層に於いて、前記の基板が、表面を {111} 結晶面とする {111}-Si 単結晶からなり、前記のリン化硼素系半導体層は、基板の {111} 結晶面に平行に配列したリン化硼素系半導体結晶の {111} 結晶面からなる底面を有し、且つ {111} 結晶面と等価な面で囲まれた、複数の四角錐状のリン化硼素系半導体結晶の単結晶体を集合させた多結晶層から構成され、

さらに該単結晶体が、基板の <110> 結晶方向に対して 60 度の角度で傾いた双晶境界面を有することを特徴とするリン化硼素系半導体層。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、珪素 (Si) 単結晶 (シリコン) 基板上に形成した、リン化硼素系半導体素子を得るに好適となるリン化硼素系半導体層の結晶構成と、それを具備したリン化硼素系半導体素子に関する。

【0002】

【従来の技術】従来において、硼素 (B) とリン (P) とを構成元素として含むリン化硼素系半導体の一種であるリン化硼素 (BP) を利用して発光ダイオード (LED) 或いはレーザダイオード (LD) 等の半導体発光素子を形成する技術が知れている (米国特許第 6、069、021 号参照)。従来のリン化硼素系半導体発光素子は、例えば、珪素単結晶 (シリコン) からなる基板上に形成されたリン化硼素層を緩衝層として含む積層構造体を用いて構成されている (上記の米国特許第 6、069、021 号参照)。最近では、ワイドバンドギャップのリン化硼素層を障壁 (クラッド) 層とする pn 接合型二重ヘテロ構造を発光部を備えた半導体発光素子用途の積層構造体も発明されている (特願 2001-158282 号参照)。

【0003】従来より、シリコン基板上には、基板表面をなす結晶面と同一の結晶面からなるリン化硼素の単結晶層が成長することが判明している。例えば表面を {100} 結晶面とする {100}-Si 単結晶基板上には、基板表面に平行に積重した {100} 結晶面からなるリン化硼素単結晶層が成長するのが知れている (庄野克房著、「半導体技術 (上)」(1992 年 6 月 25 日、(財) 東京大学出版会発行第 9 刷、77 頁参照)。また、シリコン基板上には、双晶 (twinning) を全く含まないリン化硼素単結晶層が成長できることも知れている (上記の「半導体技術 (上)」、98 頁参照)。一方では双晶を含む {100}-リン化硼素単結晶層も得られるのが知れている (上記の「半導体技術 (上)」、99~100 頁参照)。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】従来技術が開示するところでは、リン化硼素層に含まれる双晶は、結晶格子間の不整合率を緩和する様な特徴をもっているとされる (上記の「半導体技術 (上)」、100 頁参照)。従って、双晶を含むリン化硼素系半導体層を利用すれば特性、例えば、発光強度に優れる LED を得るに貢献できる。しかし、従来技術が開示する如く、双晶を含むリン化硼素系半導体層を安定して得るのは困難となっている。即ち、従来は双晶を安定して含むリン化硼素系半導体層を製造するための要件が明かとなっていない

め、例えば、発光の強度に優れる発光素子を安定して獲得するに支障を来している。

【0005】本発明は、双晶を安定して含ませることが出来る結晶構成からなるリン化硼素系半導体層を提供することを目的とする。また、本発明では、特定の結晶方向を双晶面とする双晶を安定して含む多結晶のリン化硼素系半導体層を備えることにより、特性の向上したリン化硼素系半導体素子を提供する。ここで本発明の目的とする結晶構成からなるリン化硼素系半導体層とは、従来の膜状の単結晶からなるのではなく、双晶境界面（双晶面）（C. W. パン著、「化学結晶学」（昭和45年6月15日、（株）培風館発行初版、75～76頁参照）の結晶方向を相違する単結晶体を集合させてなる多結晶からなるリン化硼素系半導体層である。

【0006】

【課題を解決するための手段】即ち、本発明は、（1）珪素（Si）単結晶からなる基板と、該基板の表面上に形成された、基板の表面を構成する結晶面と同一の結晶面を有するリン化硼素系半導体結晶からなるリン化硼素系半導体層とを備えたリン化硼素系半導体素子に於いて、前記の基板が、表面を{111}結晶面とする{111}-Si単結晶からなり、前記のリン化硼素系半導体層は、基板の{111}結晶面に平行に配列したリン化硼素系半導体結晶の{111}結晶面からなる底面を有し、且つ{111}結晶面と等価な面で囲まれた、複数の四角錐状のリン化硼素系半導体結晶の単結晶体を集合させた多結晶層から構成され、さらに該単結晶体が、基板の<110>結晶方向に対して60度の角度で傾いた双晶境界面を有することを特徴とするリン化硼素系半導体素子。である。

【0007】また本発明は、（2）前記リン化硼素系半導体層の上にIII-V族化合物半導体層が積層されて形成された異種（ヘテロ）接合を有し、該III-V族化合物半導体層が、リン化硼素系半導体層をなす単結晶体の表面に交差する結晶面の面間隔（格子間隔）に一致する間隔で配列した結晶面から構成されることを特徴とする上記（1）に記載のリン化硼素系半導体素子。

（3）前記リン化硼素系半導体結晶の単結晶体が、単量体のリン化硼素（boron monophosphide）結晶からなることを特徴とする上記（1）または（2）に記載のリン化硼素系半導体素子。

【0008】また本発明は、（4）前記リン化硼素系半導体層を、{111}-Si単結晶基板上に950℃以上1100℃以下の温度に於いて、有機金属熱分解気相成長法（MOCVD法）により、成長速度を毎分20nm以上60nm以下として形成することを特徴とする上記（1）ないし（3）に記載のリン化硼素系半導体素子の製造方法。（5）前記リン化硼素系半導体層を、{111}-Si単結晶基板上に1025℃以上1075℃以下の温度に於いて、有機金属熱分解気相成長法（MO

CVD法）により、成長速度を毎分30nm以上40nm以下として形成することを特徴とする上記（4）に記載のリン化硼素系半導体素子の製造方法。である。

【0009】また本発明は、（6）上記（1）ないし（3）に記載のリン化硼素系半導体素子からなる発光ダイオード。である。

【0010】また本発明は、（7）珪素（Si）単結晶からなる基板の表面上に形成された、基板の表面を構成する結晶面と同一の結晶面を有するリン化硼素系半導体結晶からなるリン化硼素系半導体層に於いて、前記の基板が、表面を{111}結晶面とする{111}-Si単結晶からなり、前記のリン化硼素系半導体層は、基板の{111}結晶面に平行に配列したリン化硼素系半導体結晶の{111}結晶面からなる底面を有し、且つ{111}結晶面と等価な面で囲まれた、複数の四角錐状のリン化硼素系半導体結晶の単結晶体を集合させた多結晶層から構成され、さらに該単結晶体が、基板の<110>結晶方向に対して60度の角度で傾いた双晶境界面を有することを特徴とするリン化硼素系半導体層。である。

【0011】

【発明の実施の形態】本発明では、リン化硼素系半導体層は{111}結晶面を表面とするSi単結晶基板（本明細書では、{111}-Si単結晶基板と記載する。）上に好適に形成できる。ダイヤモンド（diamond）結晶構造型のSi単結晶の{111}結晶面には、{100}或いは{110}結晶面よりも密に珪素原子が存在している。従って、{111}-Si単結晶基板では、その上に堆積するリン化硼素系半導体層の構成元素の基板内部への拡散、浸透を抑制できる利点があり、明瞭な接合界面を構成するに効果を奏する。導電性を有する{111}-Si単結晶基板ではまた、裏面に正負、何れかの極性のオーミック（Ohmic）性電極を裏面電極して敷設でき、例えば、発光素子を簡便に構成するに効果を上げられる。特に、抵抗率を1ミリオーム（mΩ）以下、より望ましくは0.1mΩ以下とする低い比抵抗（抵抗率）の導電性単結晶基板は、順方向電圧（所謂、Vf）の低いLEDをもたらすに貢献する。また、放熱性に優れるため安定した発振をもたらすLDを構成するに有効となる。

【0012】好ましくは{111}-Si基板表面上に積層する多結晶層のリン化硼素系半導体層は、硼素（B）とリン（P）とを構成元素として含む例えば、B、Al、Ga、In、P、As層（ $0 < \alpha \leq 1$ 、 $0 \leq \beta < 1$ 、 $0 \leq \gamma < 1$ 、 $0 < \alpha + \beta + \gamma \leq 1$ 、 $0 \leq \delta < 1$ ）とする。また、例えば、B、Al、Ga、In、P、N層（ $0 < \alpha \leq 1$ 、 $0 \leq \beta < 1$ 、 $0 \leq \gamma < 1$ 、 $0 < \alpha + \beta + \gamma \leq 1$ 、 $0 \leq \delta < 1$ ）から構成する。単量体のリン化硼素（boron monophosphide：BP）は、構成元素が硼素（B）と

リン(P)のみであり、多元混晶よりも構成元素が少なく成膜が容易であるという利点があるため特に好ましい。また、例えば、有機金属熱分解気相成長(MOCVD)手段に依り、成長速度を毎分2nm以上で30nm以下とし、リン等のV族元素と硼素等のIII族元素の原料の供給比率(所謂、V/III比)を15以上で60以下の範囲として成長したリン化硼素は、室温での禁止帯幅を約3eVとするワイドバンドギャップ(wide band gap)半導体となる。この様な禁止帯幅の広いリン化硼素半導体層は例えば、発光素子にあって、発光層に対する障壁(clad)層として利用できる。

【0013】多結晶層のリン化硼素系半導体層は、本発明では、複数のリン化硼素系半導体結晶からなる単結晶体を集合させて構成する。本発明に係わる多結晶層を構成する単結晶体の形状を図1に模式的に示す。{111}-Si単結晶基板11上の各単結晶体13は、周囲をリン化硼素系半導体結晶の{111}結晶面と等価な面とする正四角錐体13b或いは正四角錐体の頂部を{111}結晶面とする四角錐状体13cの外形をなし

ている。各単結晶体13の底面13aは、{111}-Si単結晶基板の{111}結晶面に平行に配置されたリン化硼素系半導体結晶の{111}結晶面からなる。底面13aとは、{111}-Si単結晶基板11の表面に接地している結晶面である。

【0014】本発明の多結晶層は、図2の平面模式図に示す如く、上記の複数の四角錐状の単結晶体13を相互に結合させて構成されている。各単結晶体13は接合面16を介して互いに連結している。各単結晶体13の内部には、双晶15を存在させてある。各単結晶体13の内部に含ませた双晶面14の存在する方向が画一的に一定ではないため、その様な異なる結晶方向に双晶を含む各々の単結晶体13から構成されているリン化硼素系半導体層を、本発明では多結晶層と称している。本発明では特に、基板をなす{111}-Si単結晶の<110>結晶方向に対し角度にして60度(°)の方向に双晶面を規則的に含ませた単結晶体13を集合させて多結晶層を構成する。ここで云う双晶面とは、具体的には、リン化硼素系半導体結晶の{111}結晶面に等価な面である。即ち、{111}、{-1, -1, -1}、{1, -1, 1}等の結晶面である。また、双晶面は、四角錐状の単結晶体13の周囲を構成するリン化硼素系半導体結晶の何れかの{111}結晶面に平行となっているのが特徴である。リン化硼素系半導体結晶の{111}結晶面を双晶面14とする双晶15の発生に因り、Si単結晶基板とリン化硼素系半導体結晶との格子ミスマッチに起因するミスミット(misfit)転位の発生、伝搬を効果的に抑制できる。リン化硼素系半導体結晶では、{111}結晶面を双晶面とする双晶は、他の結晶面を双晶面とする双晶に比較して安定して

且つ容易に形成することができる。従って、リン化硼素系半導体結晶の{111}結晶面を双晶面とする双晶を含む単結晶体を集合させて多結晶層を構成すれば、ミスフィット転位の伝搬を安定して抑制するに効力を発揮できる。

【0015】双晶の存在は例えば、電子線回折技法により撮像された電子線回折図形(パターン)上の異常回折斑点(spot)の有無より知れる(坂 公恭著、「結晶電子顕微鏡学」、1997年11月25日、(株)内田老鶴圃発行第1版、111~113頁参照)。また、入射電子線をリン化硼素系半導体層の<110>結晶方向に平行として撮像した回折図形上の<110>結晶方向と双晶に起因する回折斑点とのなす角度を計測すれば、<110>結晶方向と双晶とがなす角度を知ることができる。因みに、双晶はまた、一種の積層欠陥(stacking fault)と見なすこともできる(上記の「結晶電子顕微鏡学」、112頁参照)。

【0016】本発明に係わる双晶を含む単結晶体を集合させた多結晶層を得るには、成膜時の条件を精密に制御する必要がある。特に、{111}結晶面を双晶面とする双晶を含むリン化硼素系半導体結晶からなる四角錐状の単結晶体は、例えば、トリエチル硼素(C_2H_5), B)/ホスフィン(PH_3)/水素(H_2)を原料系とする常圧の有機金属熱分解気相成長法(MOCVD法)によって、成長温度を精密に制御して形成する。上記MOCVD手段にあって、リン化硼素系半導体多結晶層、特に、単量体のリン化硼素の多結晶層を得るに好適な温度の範囲は、950℃以上1100℃以下さらに好ましくは1025℃~1075℃の範囲である。インジウム(In)を含むリン化硼素系半導体多結晶層の形成には、より低温の約950℃~約1000℃が好適である。アルミニウム(Al)を構成元素として含むリン化硼素系半導体多結晶層は、比較的に高温の約1050℃~1100℃が好適である。約1200℃を越える高温では、BP₂、B₁₂P₂等のリン化硼素多量体が発生し易くなり、組成的に均質なリン化硼素系半導体層を得るに不都合となる。

【0017】また、双晶を内在する単結晶体を効率的に形成するには、成長の速度を毎分20nmから毎分60nmの範囲とするのが望ましい。単量体のリン化硼素(BP)にあっては、毎分30nm~40nmの成長の速度が特に好適である。60nmを越える速度で成長させた単結晶体には、多量の双晶(積層欠陥)に加え、点欠陥や転位等の他の結晶欠陥の密度が急激に増加する不都合を生じ、結晶性に優れる多結晶層を得るに困難を来す。逆に、成長速度を小さくすると、即ち、所望の層厚のリン化硼素系半導体層を得るにより長時間を要する状況とすると、成長時に於いて構成元素のリン(P)の揮散する機会が増す。このため、20nm/分未満の小さな成長速度は、リン(P)の蒸発、揮散に起因するリン

化硼素系半導体層の構成元素間での化学的な当量比の不均衡が急激に発生する。化学量論的に不均衡な組成のリン化硼素系化合物半導体層には、点欠陥が多量に含まれているため本発明に係わる多結晶層とするには不適である。

【0018】単結晶体の内部に含まれる双晶は、例えば、基板のSi単結晶と単結晶体を構成するリン化硼素系半導体との格子ミスマッチに起因して発生するミスフィット転位の伝搬を抑制する作用を有する。例えば、Si基板と単結晶体との接合界面から発生したミスフィット転位は、単結晶体の内部に在る双晶により吸収され、より上方への伝搬を抑制する作用を有する。これに依り、単結晶体の上部に至るまで貫通する貫通転位の密度は減ぜられる。

【0019】また、そもそもミスフィット転位の少ない単結晶体を得るには、Si単結晶基板とリン化硼素系半導体層との中間に緩衝層を設ける技術手段も有効となる。緩衝層は、非晶質または多結晶のリン化硼素系化合物半導体層から構成するのが好適である。非晶質または多結晶の緩衝層は、基板をなすSi単結晶との格子不整合性を緩和して、ミスフィット転位等の結晶欠陥密度の小さいリン化硼素系半導体層をもたらすに効果を発揮する。また、特に、緩衝層をリン化硼素系半導体から構成すると、硼素とリンは成長を促進する「成長核」として作用するため、その上に連続性のあるリン化硼素系半導体層を形成するに効果を奏する。緩衝層をリン化硼素から構成する場合、層厚は約1nm以上で50nm以下、更には2nm以上で15nm以下とするのが好ましい。

【0020】双晶を含む単結晶体を集合させて構成した多結晶層の表層部は、下方のSi単結晶基板側から貫通して来るミスフィット転位が少なく、結晶性に優れる領域となっている。従って、本発明の構成からなるリン化硼素系半導体多結晶層上には、結晶性に優れる堆積層を成長させることができる。特に、堆積層を、多結晶層の表面をなすリン化硼素系半導体の単結晶体の表面に交差する結晶格子の面間隔（格子間隔）と同一の間隔に配列した結晶面から構成される結晶層とすると、ミスフィット転位の少ない結晶性に優れる結晶層を得るに効果を上げられる。図3に模式的に示す如く、単結晶体の{111}結晶面からなる表面17に交差する低次のミラー指数{hkl}面には、 $h=k=l=1$ の{111}の他、{110}、{100}結晶面等がある。これら{hkl}結晶面の単結晶体の{111}結晶面表面に於ける間隔（ $=d$ ）は、立方晶閃亜鉛鉱結晶のリン化硼素系半導体結晶にあつては、 $d(\text{\AA}) = a / \{ (h^2 + k^2 + l^2)^{1/2} \cdot \sin \theta \}$ で与えられる。a（ \AA ）はリン化硼素系半導体結晶の格子定数であり、 θ は{111}結晶表面17とそれに交差する結晶面とがなす角度（ $^\circ$ ）である。例えば、リン化硼素（BP）多結晶層の表面上に、その表面を構成するBP単結晶体13の{1

11}結晶面と直角に交差する{110}結晶面と格子間隔（ $\approx 3.21 \text{\AA}$ ）に一致する、六方晶の（1.0.0.0.0.）結晶面を配列したウルツ鉱結晶型（Wurtzite）の窒化ガリウム・インジウム混晶（ $\text{Ga}_{0.94}\text{In}_{0.06}\text{N}$ ）結晶層を堆積する例が上げられる。このような結晶性に優れる結晶層は、例えば、発光素子にあつて、高強度の発光をもたらす発光層として好適に利用できる。

【0021】本発明に係わるリン化硼素系半導体の多結晶層を利用すれば、リン化硼素系半導体素子として例えばLEDを構成できる。LEDは例えば、p形{111}-Si単結晶基板と、基板上に硼素（B）とリン（P）とを含む非晶質の緩衝層を介して成長した本発明に係わるp形リン化硼素（BP）多結晶層と、多結晶層上のn形発光層と、発光層上の成長させた本発明に係わるn形リン化硼素（BP）多結晶層とを備えた積層構造体を基に構成できる。室温での禁止帯幅を約3eVとするリン化硼素の単結晶体から構成される多結晶層は、発光層を挟持するクラッド（clad）層として利用できる。発光層は $\text{Ga}_x\text{In}_{1-x}\text{N}$ （ $0 \leq x \leq 1$ ）或いはリン化窒化ガリウム（ $\text{GaN}_{1-y}\text{P}_y$ ； $0 < y \leq 1$ ）等からなる井戸（well）層を備えた単一或いは多重の量子井戸（Quantum Well）構造から構成することもできる。因みに、井戸層に対するバリア（barrier）層は窒化アルミニウム・ガリウム（ $\text{Al}_x\text{Ga}_{1-x}\text{N}$ ； $0 \leq x \leq 1$ ）や $\text{GaN}_{1-z}\text{P}_z$ （ $0 \leq z < 1$ 、 $z < y$ ）等から構成できる。上記の積層構造体の表層をなすn形リン化硼素多結晶層にn形オーミック（Ohmic）電極を設け、また、p形Si単結晶基板の裏面にp形オーミック電極を配置して、pn接合型ヘテロ構造のLEDを構成できる。

【0022】また、アンドープ（undoped）で高抵抗の{111}-Si単結晶基板と、基板上に硼素（B）とリン（P）とを含む多結晶の緩衝層を介して成長した酸素（O）が添加された高抵抗のリン化硼素多結晶層と、多結晶層上に高純度のn形窒化ガリウム（GaN）層を活性層（電子走行層）として備えた積層構造体からは、ヘテロ接合型の電界効果トランジスタ（FET）等の電子デバイスを構成できる。FETは、活性層上にショットキー（Schottky）接合型のゲート（gate）電極を、また活性層上に積層したn形コンタクト層の表面のゲート電極を挟んで対向する位置にソース（source）及びドレイン（drain）オーミック電極を、それぞれ設けて構成する。

【0023】

【作用】本発明のリン化硼素系半導体結晶からなる双晶を含む単結晶体は、Si単結晶基板とリン化硼素系半導体との格子ミスマッチに起因するミスフィット転位の上方への伝搬を抑制する作用を有する。

【0024】

【実施例】以下に、 $\{111\}$ -Si単結晶基板上に多結晶層からなるリン化硼素(BP)層を備えた積層構造体からLEDを作製した例を用いて、本発明を具体的に説明する。

【0025】本実施例に係わるLED1Bの平面模式図を図4に示す。また、図4に示す破線X-X'に沿ったLED1Bの断面模式図を図5に示す。

【0026】LED1B用途の積層構造体1Aは、硼素(B)ドーブでp形の $\{111\}$ 面から 2° オフ(off)した面を有するSi単結晶を基板101として構成した。基板101上には、トリエチル硼素($(C_2H_5)_3B$) / ホスフィン(PH_3) / 水素(H_2)系常圧MOCVD法により、 $350^\circ C$ で、as-grown状態で非晶質を主体とするリン化硼素からなる緩衝層102を堆積した。緩衝層102の層厚は約10nmとした。

【0027】緩衝層102の表面には、上記のMOCVD気相成長手段を利用して、 $1050^\circ C$ で多結晶層からなるp形のリン化硼素(BP)層103を積層した。成長速度は毎分40nmに設定した。p形リン化硼素層103のキャリア濃度は $1 \times 10^{19} cm^{-3}$ とし、また、層厚は約400nmとした。p形リン化硼素層103の室温での禁止帯幅は大凡、3.0eVであった。

【0028】透過型電子顕微鏡(TEM)を利用した断面TEM像と電子線回折図形から、p形リン化硼素層103の内部の結晶構造を解析した。図6にSi単結晶基板101の $\langle 110 \rangle$ 結晶方向に平行に電子線を入射させて得たp形リン化硼素層103の回折パターンの模写図を示す。図6に示す様に、多結晶層からなるp形リン化硼素層103をなす各単結晶体103aの $\{111\}$ 結晶面に由来する回折斑点19は、 $\langle 111 \rangle$ 結晶方向に平行に、Si単結晶基板101の $\{111\}$ 結晶面に由来する回折斑点20に隣接して位置していた。これより、単結晶体103aは、Si単結晶基板表面の $\langle 111 \rangle$ 結晶方向に平行に、リン化硼素の $\{111\}$ 結晶面が積重した結晶体であるのが示された。また、図6の回折図形に示す如く、基板101のSi単結晶の $\langle 111 \rangle$ 結晶方向に整列した単結晶体103aの回折斑点を点対称の中心として、近隣に $\{111\}$ 結晶面を双晶面とする双晶からの回折斑点21も確認された。これより、単結晶体103aは $\{111\}$ 結晶面を双晶面とする双晶を含んでいると確認された。双晶に起因する回折斑点21の位置から、双晶面はBP結晶の $\langle 110 \rangle$ 結晶方向に対し角度にして60度の方向に存在しているのが示された。

【0029】p形リン化硼素層103の表面には、トリメチルガリウム($(CH_3)_3Ga$) / トリメチルインジウム($(CH_3)_3In$) / アンモニア(NH_3) / H_2 系常圧MOCVD法により、 $850^\circ C$ で六方晶のn形の窒化ガリウム・インジウム($Ga_{0.90}In_{0.10}N$)からなる発光層104を積層した。発光層104の層厚は約10

nmとした。

【0030】発光層104の表面上には、多結晶層からなるアンドープでn形のリン化硼素層105を積層させた。n形リン化硼素層105は、上記のMOCVD気相成長手段を利用して、 $1050^\circ C$ で積層した。成長速度は毎分30nmに設定した。n形リン化硼素層105は、上記のp形リン化硼素層103と同様に、BPの $\{111\}$ 結晶面からなる正四面体状の単結晶体105aの集合体から構成されるものとなった。n形リン化硼素層のキャリア濃度は $8 \times 10^{18} cm^{-3}$ とし、また、層厚は約300nmとした。n形リン化硼素層105の室温での禁止帯幅は大凡、3.0eVであった。

【0031】電子線回折図形より、n形リン化硼素層105をなす各単結晶体105aの $\{111\}$ 結晶面は、 $\{111\}$ -Si単結晶基板101の $\langle 111 \rangle$ 結晶方向に平行に配列していた。また、単結晶体105aの内部には、BP結晶の $\{111\}$ 結晶面を双晶面とする双晶の存在が確認された。双晶面はBP結晶の $\langle 110 \rangle$ 結晶方向に対し角度にして60度の方向に存在した。

【0032】室温禁止帯幅をおよそ3.0eVとするp形リン化硼素層103及びn形リン化硼素層105と、それに同一の格子面間隔を有する材料からなる発光層104とからpn接合型ダブルヘテロ(DH)構造の発光部106を構成した。

【0033】n形リン化硼素層105の表面の中央部には、台座電極を兼ねる円形のn形オーミック電極107を配置した。n形オーミック電極107は、金(Au)・ゲルマニウム(Ge)合金 / ニッケル(Ni) / 金の真空蒸着膜を重層させた多層構造から構成した。n形オーミック電極107の直径は約120 μm とした。また、p形のSi単結晶基板101の裏面の略全面には、p形オーミック電極108を配置してLED1Bを構成した。p形のオーミック電極108は、アルミニウム(Al)真空蒸着膜から構成した。Si単結晶基板101を $[211]$ 方向に平行及び垂直な方向に裁断して、一辺を約300 μm とする正方形のLED1Bとした。

【0034】n形オーミック電極107に金(Au)線を結線した後、n形オーミック電極107及びp形オーミック電極108との間に順方向に20ミリアンペア(mA)の動作電流を流通して発光特性を調査した。発光中心波長は約420nmとなった。発光スペクトルの半値幅(FWHM)は32nmとなった。本発明では、ミスフィット転位の密度の低いp形リン化硼素層103を下地層として発光層104を形成する構成としたため、発光領域には非発光の暗線(dark line)(米津、宏雄著、「光通信素子工学—発光・受光素子」(平成7年5月20日、工学図書(株)発行5版、155~156頁参照)は視認されず、発光領域の全面から略均等の強度の発光がもたらされた。このため、一般的な積分球を利用して測定されるチップ(chip)状態

での輝度は8ミリカンデラ (mcd) となり、高発光強度のLEDが提供されることとなった。また、LED 1Bの電流-電圧 (I-V) 特性には、転位の影響に因る局所的な耐圧不良 (local breakdown) の発生は認められず、本発明の構成からは、良好なpn接合特性 (整流性) を呈するpn接合型の発光部 106 がもたらされることが示された。I-V特性から求めた順方向電圧 (所謂、 V_f) は3.6V (順方向電流=20mA) で、また、逆方向電圧は6V (逆方向電流=10 μ A) であり、高耐圧であるLEDが提供された。

【0035】

【発明の効果】本発明では、表面を{111}-結晶面とするSi単結晶基板上に設けるリン化硼素系半導体層を、ミスフィット転位を吸収して、転位の伝搬を抑制できる双晶を含む単結晶体を集合させた多結晶層から構成することとしたので、転位密度の少ない結晶性に優れたリン化硼素系半導体層を構成することができ、これを利用すれば特性に優れたリン化硼素系半導体素子、例えば、発光強度、整流性及び耐圧性に優れたリン化硼素系半導体発光素子を提供できる効果がある。

【図面の簡単な説明】

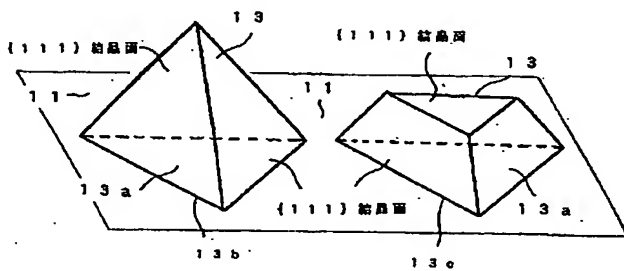
【図1】本発明に係る多結晶層を構成する単結晶体の形状を示す模式図である。

【図2】本発明に係る多結晶層の構成を示す平面模式図である。

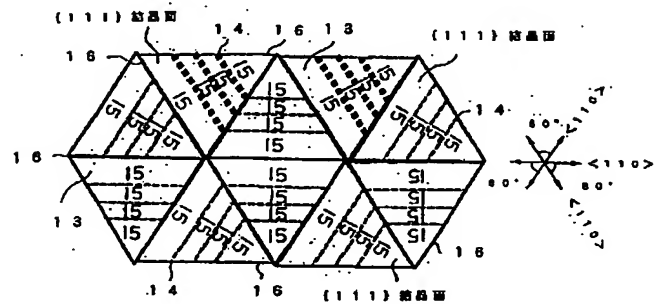
【図3】本発明に係るリン化硼素系半導体層の{111}結晶面に交差する結晶面を表す模式図である。

【図4】本発明の実施例に係るLEDの平面模式図である。

【図1】



【図2】



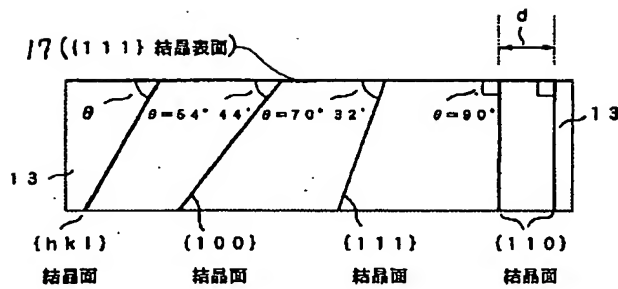
【図5】図3の破線X-X'に沿ったLEDの断面模式図である。

【図6】本発明の実施例に係るリン化硼素層の電子線回折パターンの模写図である。

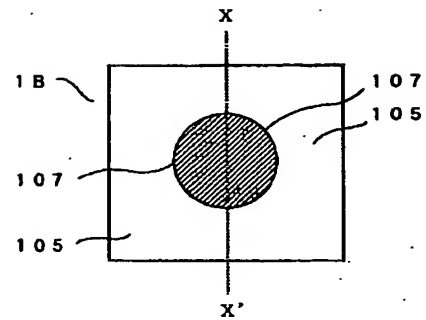
【符号の説明】

- 1A 積層構造体
- 1B LED
- 11 Si単結晶基板
- 12 リン化硼素系半導体多結晶層
- 13 単結晶体
- 13a 単結晶体の底面
- 14 双晶面
- 15 双晶
- 16 単結晶体の接合面
- 17 単結晶体の{111}結晶面
- 18 {hkl}面
- 19 リン化硼素単結晶体の回折スポット
- 20 Si単結晶基板の回折スポット
- 21 双晶の回折スポット
- 20 101 Si単結晶基板
- 102 緩衝層
- 103 p形リン化硼素層
- 103a 単結晶体
- 104 発光層
- 105 n形リン化硼素層
- 105a 単結晶体
- 106 発光部
- 107 n形オーミック電極
- 108 p形オーミック電極

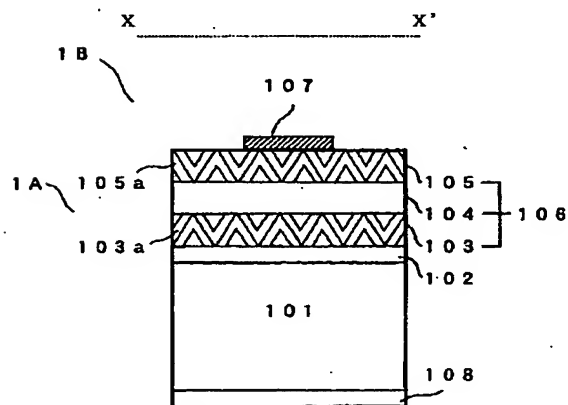
【図 3】



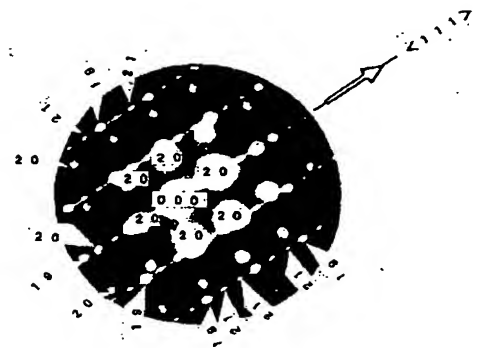
【図 4】



【図 5】



【図 6】



フロントページの続き

F ターム(参考) 5F041 AA04 AA21 AA40 CA04 CA05
CA12 CA23 CA24 CA33 CA34
CA40 CA65
5F045 AA04 AB15 AC01 AC09 AD13
AD14 AD15 AE29 AF03 CA09
5F052 KA01 KA05